將軍は空を仰いで莞爾と笑つた。

天が漸く明け始めるとも未だ敵壘に日章旗は見られなかつた。

よく見ると數百の日本兵が砲臺下の草原に打伏してゐるので、

『彼樣な卑怯な振舞をしちや可かん、いつまでも草の中に隱れてゐるやうでは、ても完全な勝利を得る事は出來ない』

將軍はさう言つたが、何ぞ知らん伏勢ではなくて、これこそ日本兵が悉く壯烈な戰死を遂げて居たのであつた。

一部隊は滅亡したが大部隊の戰線からは更に猛烈な砲擊は續けられてゐて將軍の立つてゐる山の中腹へも砲丸が飛んで來た、中にも不發彈等が轉がり落ちると其時には

『愉快々々』

と將軍は歡んだ、二十日石橋の北方を攻略し二十二日盤龍山の堡壘を占領する迄

には、幾十回の激戰に實に五千余の貴い肉彈を捨てたのであるのを見ても攻擊軍が防禦軍よりも地形戰術の上に於て不利なのが明瞭である。

第一回の總攻擊は兵と兵との戰ひではなく實に人と武器との戰ひであつた、肉彈と鐵彈と白刃と堡壘とが激烈な戰鬪を交へたのであつたから乃木式の果斷極りなき猛襲も僅かに盤龍山東西の二砲臺を攻略するに止つた、然し第一次の不成功はやがて大きな敎訓を與へて第二回目は少くとも武器と武器とを以つて戰ふ事にした。敵の完全な防禦陣地に對して相當なる攻道具、それは電光形の對壕を堀る事であつた。

一度兵を收めて將軍は柳樹屯まで引き上げた。

人家五六軒の一寒村ではあつたが青々と柳が繁つて綠陰から　涼しい風が吹いてゐる。

粗末な机に恁つて、靜子夫人への返書を書かうとしたが、其處には一枚の私用の

紙も持たなかつた、私物と官物區別の嚴然たる將軍は伊地知參謀長に

『あなた紙はお持ちではありませんか』

と漸く私用の紙を貰つて手紙を書いた。

夜に入ると蚊は激しく人達の睡眠を妨げた。

『ナゼ蚊帳をお吊りにはなりません』

些とも蚊帳を吊らぬ將軍に大島參謀次長は聞いた、すると將軍は。

『第一線に居る兵は蚊帳を吊つては居ない筈だ』

と答へて苦樂を共にする覺悟を示した。

此時にも敵は間斷無く活動して、八月二十七日の雷雨を利用し激しく砲火を浴せかけて來たが、これは大した損害もなく擊退して仕舞つた。

かく坑道工事も次第に進み、攻擊準備も漸く整頓した九月十九日此處に第二回の總攻擊に着手する事になつた。

第三軍司令官乃木中將は九月十九日第一第九兩師團に向つて攻擊を開始すべきを命じ、第一師團及び攻城砲等をして援助せしめて敵を牽制させた。

即ち右翼第一師團は二〇三高地に向ひ中央第九師團は角面堡に對し、右翼團は主として牽制運動に任ずる事になつた、第一師團は直ちに三縱隊を作つて右縱隊は二〇三高地へ、中央縱隊は海鼠山へ、左縱隊は水師營南方堡壘への攻擊部署に就いたのであつた。

右央隊では決死隊を編成して屢突擊を試みたが海鼠山及び椅子山の西の端から打ち出す機關砲は雨の如く塹濠の破隙から進んだ一隊は全滅した有樣に怒髮天を突いた他の一隊は忽ち驀地に敵の塹濠に躍り込み力の限り白兵戰を演じた結果、其一部を攻略する事が出來た。

二十日は何でも海鼠山を占領せねばと第二第三兩隊から撰び出された十人づゝの決死突擊隊は將校二人の引卒の下に砲兵の掩護を受けて、雨霰と降り頻る彈丸の下

を潛つて物凄くも又勇ましく突擊を企てたが流石の敵兵も此勢に辟易したか遂に逃げ去つたので、午後六時海鼠山は我物の有に歸した。

一縱隊も角面堡に對して砲火を開き幾多の犧牲を捧げつゝ工兵の爆發藥に援助されて確實に同堡壘をも略取する事が出來た。

一方の右翼團の左翼も水師營南方の第一壘に突進して行つたが敵の機關砲に傷められて不幸全滅に近い損傷を蒙り失敗に終つたが二十日早朝から更に猛烈に攻擊を加へて第一壘を拔き更に第二、第三、第三を乘取つて十一時四十五分、漸く占領の實を擧ぐるに至つた。

これに依つて全部は二〇三高地へ力を集中する事になつたのであるが同高地は旅順港内を一望の下に收め見る地點である關係上味方に取つても敵に取つても重大な高地で兩軍が死力を盡して攻防に意を注いだのは蓋し當然な事であつた。

言ふ迄もなく旅順の要塞は支那政府が五億圓、露國が二億圓を費した築造で、其外國人すら百年攻めても陷落する事はあるまいと評した難波不落の要害で、其堅城へ向つたのが第三軍司令官の乃木將軍、將卒は實に此要害を略取すべき大切な任務を引受けてゐたのであつた。

右翼團の右縱隊の第一第三の丈隊から派遣された四つの斥候隊は二〇三高地の麓に達して一部の鐵條網を切斷し、各隊の攻擊準備を待つて武藤中尉の指揮する決死隊は先登となつて驀進し、工兵と共に勇戰をしたのであつたが沈默を守つてゐた敵兵は突然大小砲を以つて猛射を企てたため第一線は實に全滅に近い大損傷を蒙つた

二十日にも又突擊、二十一日にも又決死隊の突擊があり、敵の逆襲も又來つて工兵の大部分は先づ斃れ、突擊隊の勇士は悉く討死して腥風滿山に漲る有樣を呈したが、我軍の悲境に引きかへて敵の兵力は次第に增加し我兵の密集せる斜面目かけて盛んに砲火したので危險言ふばかりもなく二十三日午前四時恨みを呑んで舊地點へ退却するの己むなきに至つた。

此總攻撃も亦不成功に終つたが此時待ち難ねた二十八珊榴彈砲六門が到着した、これは内地の要塞に備へてあつたのだが遂に半年以上の日子を費して戰地へ送つて來たのであつた。

直ちに工兵隊は全力を注いで半月余の中に砲床を作り上げ、團山子、鞠家屯、王家甸に二門宛を据えて射撃する事になつた、これと同時に海軍陸戰銃砲隊も海鼠山に望樓を設けて十五珊、十二珊の速射砲を以つて盛んに敵壘を砲撃してゐたが司令部では今度の攻撃に就いて愼重な協議を遂げ第一第二の總攻撃にも失敗し、電光形殘濠を利用しての突撃も爆發も十分に功を奏さなかつたので今度は愈々正面攻撃を行ふ事に決し、

『攻城の前途は猶遼遠である、此度の總攻撃で陷落は斷言出來ぬから、彈藥は務めて節約する樣に心掛けよ』

と攻城砲兵に訓示をした。

正面攻撃に對する部署は定められて第一師團は松樹山、第九師團は二龍山、第十一師團は東鷄冠山より北堡壘に至る間、他は單に牽制運動をする事にした、やがて攻路の堀鑿、對壕作業は續けられ幾多の要塞戰の經驗上、手擲彈、追撃砲、砲眼鉄板等の特種の兵器を發明して懸命に作業の便を圖つてゐた。

遂に十月二十六日を期し松樹山から東鷄冠山に互る正面攻撃を開く旨を達した。時は午前八時三十分、漸く狹霧晴れ渡る朝空に、榴彈砲、攻城砲、海城砲は一時に砲門を開いて打ちかけた、物凄い砲聲は殷々と山河を慄はせ豆を煎るやうな榴彈の音は霰の如く響いてゐた。

その結果には第一師團は松樹山の前面の散兵壕を占領し第九師團も散兵壕を奪ふて鉢卷山を略し、第十一師團は東鷄冠山堡壘の外岸を破壞して其一部を奪ふて鐵條網を切斷したのであつたから『これなら大丈夫』と司令部ば鳳凰山東南の高地に進んで、攻城諸砲に射撃を命ぜしめて各師團の歩兵は愈々此處に大突撃を實施する準

備を始めた。

二百三高地

第一回の總攻撃は未明であつたから、今度は午後一時に定められて遂に攻撃を始められたが、未だ猛烈な敵彈の威力に縮められ第一師團も目的を達し得ず、第九師團も爆發藥に惱まされ、P堡壘を占領したのは柄の間、直ぐに奪ひ歸されて退却をした。

怒り心頭に發した一戸少將は猛然として第一線に奮進し激戰の結果に砲壘全部を占領して味方のために氣焔を吐いた、P堡壘を其後一戸堡壘と呼ぶのは其ためである。

第十一師團も東鷄冠山北十壘に主力を注いだが重要の地域であるから敵も死力を

竭して防ぎ戰ひ容易に望みは遂げられなかつた、第二十二聯隊から出た四十七人の決死隊も胸墻内に侵入したが敵の機關砲のため殲滅の慘事を見なければならなかつた、然し東鷄冠山に向つた中央隊は高地中腹の散兵壕を略取し更に砲壘に進入して一部は逆襲に退却したが、一部は瘤山を占領する事が出來た。

斯く三十日の突擊も幾多の犧牲を失ふて一戸砲壘と瘤山とを占領したが肝腎の二〇三高地は何の影響もなく皮肉にも聳えてゐた、旅順での重要な山はこの高地と大孤山とであつたが大孤山は占領はしたが眺望はなくて旅順に對する地形上甚だ不利な場所であつた。

旅順港内全部と全市街とを一目に見るには何うしても二〇三高地を取らねばならないから、乃木司令官は更に松樹山二龍山、東鷄冠山北堡壘の攻撃續行を命令した

恰も此頃であつた、坂野鐵次郎氏が戰時郵便の用務を帶びて戰地へ出張して、柳樹房の乃木將軍を訪づれた。

『内地では第三軍の行動を何と評してゐるかネ』
將軍は面を擧げてかう尋ねた、坂野氏は
『皆が不思議がつてゐます』
『ふむ』
將軍は更に聞き耳を立てた。
『勇敢無比の乃木將軍が指揮してゐられるのだから今日は落ちるだらう、明日は陷落するだらうと言つて居ますが』
『左樣か』
將軍はさう言つて沈默したがやがて
『兵は決して弱くはないがなア』
と言つた、同時に彼の老眼には涙が玉と宿つてゐた。
此時にも敵海軍は旅順港内深く潛んで自存の策を固持し、浦鹽艦隊は修理も已に

完成した噂さが傳へられて來た。
一方衞兵長に心ならずも赴任した乃木保典少尉は毎日機會があれば原隊に復歸して小隊長として戰線に立ちたい志望を抱き持つてゐたので師團長に對しても
『原隊へ歸して下さい』
と幾度も懇請し司令本部へ願書も出した。
乃木家後繼者を失ふ事を憂ふる友安旅團長は原隊へ復歸させる事も出來ぬので電話で伊地知參謀長とも相談して將軍へ迎けて手紙を出した、將軍は手紙を讀み終ると、
『いかん、こりやいかん、いかなる條件でも副官には遣られぬ』
と言つた。
けれど如何にもして助けたいと思ふ友安少將は三度の手紙を出して拒絶されたので遂に四度目には、『副官に適當な人物のないため當分の中お願する』と言ふ文句

を書いた。

此當分の中の文句は少なからず將軍の心を動かしたと見えて遂に此相談は纏つた友安旅團長が無理に副官にさせた乃木保典は非常の好成績で、殊に地圖の作製には往々〳〵專門家を驚かして警備の變更には最も間に合つた。

當時クロパトキン將軍は次第に援軍を得て勢力を增加するに引替へ大山將軍を將とする我軍は不足を感ずるばかりで、一日も早く第三軍は旅順を攻略して其精鋭を北行援助させねばならず、同時に露國の太平洋第二艦隊が進航して來る事實が判明したので乃木將軍は一世一代の心痛をしてゐたのであつた。

敵兵が其樣に增加して來たと言ふ事は我軍に取つては殆んど豫想外で西伯利亞鐵道は單線であるから輸送力も知れたものと思つてゐたが、敵の兵勢は凄まじく增えて來た、又海軍の波羅的艦隊が來ては二倍の敵に當る事になるし、旅順陷落前に敵の艦隊を見ては港內の艦隊も活動をするに違ひはなく、腹背敵を受けて我軍の危機

は迫るので、この旅順の占領こそは實に運命を決する一戰であつた。

それだけ乃木將軍の苦悶は譬ふるに物がない。

十一月三日が來た。

天長祝日の當日內地にあれば疊の上に祝盃を擧げられるが第三軍の將卒は陰鬱な土窟の中に罐詰を開き冷酒を酌んで遙かに、天皇陛下の萬歲を叫んだのであつた、處へ丁度旭川第七師團が大迫中將指揮の下に上陸して第三軍下に屬して新らしい生命を加へた。

その中にも工兵隊は毎日坑道を堀つて、松樹山と二龍山に肉薄して、開戰以來の大爆破をやつたが、さしもの露國兵も一人の生存者を殘さぬ位、凄絕悲絕を極めたものであつた。

續いて二龍山に及んでは第三堡壘が殘されるばかりとなつた。

斯ういふ風に準備が調子た處へ、沈痛な勅語が乃木軍司令官の手元へ到達した。

旅順要塞ハ敵ガ天險ニ加工シテ金湯トナシタル所ナリ其攻略ノ容易ナラサル固ヨリ怪ムニ足ラス、朕深ク爾等ノ勞苦ヲ察シ日夜軫念ニ堪ヘス、然レトモ陸海軍ノ狀況ハ旅順攻略ノ機ヲ緩ウスルヲ得サルモノアリ斯ノ時ニ當リ、第三回總攻擊ノ擧アルヲ聞キ其時機ヲ得タルヲ喜ヒ成功ヲ望ムノ情甚ダ切ナリ、爾等將卒夫レ自愛努力セヨ

乃木將軍は感激して直ちに奉答した。

旅順要塞攻擊ニ對シ勅語ヲ忝フス、臣希典等感激恐懼ニ堪ヘズ、將卒一般聖旨奉体シ誓ツテ速ニ軍ノ任務ヲ遂行センコトヲ期ス

謹ンデ奉答ス

翌二十一日、各師團長、參謀長、攻砲兵司令官、野戰砲兵旅團長を召集して總攻擊の訓示を下した、その日山縣參謀長から將軍へ宛てゝ詩を電報で贈つて來た。

百彈激來天亦驚　合國半武萬屍橫

精神到處固於鐵　一擧竟ニ旅順城

夢陷旅順山有作　供乃木將軍一粲

合雪

とあつた。

讀み終つた將軍の眉目には堅い〳〵大決心が見えた。

愈々二十六日からは總攻擊の開始され、攻擊砲兵は破壞射擊、制壓射擊を行ふて野戰砲兵旅團と各師團砲兵と相前後して指定目標に對し物凄い砲彈を浴せかけた、將軍は戰爭の止み間〳〵に單騎戰線を巡視して燐寸一本さへない兵員へは途中拾つた空箱に軸木を一杯つめては無言のまゝ投げ捨てて通つたのみならず『自今途中に於て敬禮するに及ばず』と言ひ渡した。

十二月の嚴冬に入ると寒さは甚だしくなつたが司令部の火鉢には螢火程の火よりなかつた。

『もう少し火をお置きなさつては如何ですか』

若し斯う問ふ者があれば將軍は、

『今まで莫大の軍費を使つてゐるし、これからは何れ程入るか判らぬのに、一錢も無駄には出來ぬ』

と襟を直して言ふのであつた。

偖て二龍山、松樹山、東鷄冠山の攻撃は略豫定の目的に達したので二十八日から愈々二〇三高地の攻撃にかゝつた。

將軍は第一師團の高崎兵の奪つた高崎山にあつて部署を定め其夜も風寒い柳樹房の司令部へ歸つて寢たが其夜

有死無生何足悲　千年不朽表忠碑
皇軍十萬誰英傑　驚世功名是此時

の詩を吟じた。

十二月一日は將軍に取つて忘れる事が出來ぬ、記念が作られた、それは外ならぬ乃木保典少尉の戰死であつた。

友安旅團長の副官として地下室に作られてある旅團司令部に其日も事務を處理してゐたが、老鐵山から打ち出す砲彈は直ぐ其上で破裂して、騎兵も歩兵も電話手も電話を持つた儘で微塵に碎けた。

友安旅團長は九死に一生を得て煙の中に立上ると、續いて塵埃の中から書記の一人が、

『あア豪い芥だ』

と言つた、次に

『何と言ふ甚い芥塵だらう』

と叫ぶ保典の聲が聞えた旅團長は保典を氣遣ふてゐた矢先きであつたから直ぐに

『乃木か、何うした』

と尋ねた、やがて沈着の聲がそれに答へる。

『閣下も御無事ですか』

『命は助かつた、其邊の樣子は何うか』

『何處も崩る處がなくなりました』

と誰かの聲がした、實際深く堀つた塹濠が一發の砲彈に破壞せられて平地同樣になつて仕舞つたのであつた、其ために旅團は戰鬪準備に不足を生じたので師團司令部へ增兵の催促、しかも火の點く樣な命令で友安旅團は急に戰線へ立たねばならなくなつた。

師團司令部へ援兵を乞ふても効能が無いので村上聯隊長へ談判の手紙を持たせて、乃木保典少尉はこの特使に立つた。

聯隊司令部までは五六里の道程、少尉は漸く此使者の任を全うして、工事の落成せぬ坑道を躍進しながら旅團司令部へ急いだ。

敵は海軍機關砲を置いて間斷なく射擊し一人出れば一人、五人出れば五人、少しでも首を出すと打ち殺される危險があるのだが、急ぎに急いだ乃木少尉の復命は時間の問題より外に何もなかつた。

『是位の事に恐れて何うなるものか』

と自ら次の地隙に躍進し更に

『ぐづ〳〵するな、こゝへ來い』

と首を出すが否や、一發の敵彈は魔の如く風を切つて保典少尉の前額を貫いた。

友安旅團長は乃木少尉の姿が見えぬので心痛してゐる處へ傳令が其戰死を傳へて來た。

『乃木少尉殿は遣られました』

『えゝ』

旅團長は驚きの聲を發した。

『任務は果したか、それとも未だか』

『任務を終つた後でありました』

『さうか、直ぐ死体を取れ』

さう言つて師團司令部へ電話をかけた、やがて伊豆參謀から電話があつた。

『殘念ながら乃木少尉只今戰死しました、將軍へ申し上げて下さい』

其時乃木將軍は暗い部屋で椅子に凭れたまゝ、假寢をしてゐる時であつた、白井參謀は直ちに其前に立つた。

『只今伊豆參謀から電話で乃木少尉が二〇三高地の中腹で戰死の報告がありました』

と言つた、此沈痛な報告を聞いて將軍は只

『さうか』

と言つたばかり、然かも其聲は滿足さうに見えた。

陛下の御ため、御國のためとは言へ、二人よりない、子を殺して悲哀の色を見せ

ず反つて滿足さうに頷いた乃木希典の心には、神武帝建國以來の貴い大和魂の血が流れてゐるのであつた、外國人をして其理解するに難からしむる武士道の精華が、父の教訓となり、玉木文之進の養育となつて百鉢の鐵ともまがひ、宿つて居たのであつた。

しかも副官や主計連中が死体を納めるために新らしい材木を詮議しようとするのに對して、

『一度死すれば靈は其地に滅するが、行く處へ行く、我子に限つて棺へ入れるとは何事だ、戰場に屍を曝らすのは男子の本望、宜しく燒いて一片の骨として下さい』

と命じた。

初めから兩子息を殺すつもりで父子三人潔く討死して皇恩の萬分一を報う覺悟であつたのであつた。

水師營に敵將と會す

保典少尉の戰死した三十日の戰況は未明から二〇三高地と赤阪山とに銃砲を打ちかけてゐる間は敵は塹壕に沒れて姿を見せないが砲擊を休めて突擊でも企てようとすれば直ちに小銃を射擊して頑强に抵抗するので容易に成功の見込みがなかつた、

天漸く明け放れた頃、乃木將軍は高崎山へ馬を進めて兒玉總參謀長、福島參謀、第一第七兩師團長、伊地知參謀長と共に種々の評定をした。

然し未明以來の攻擊で二〇三高地堡壘掩蓋の大部分を破壞したので乃木將軍は、

『早く其處に觀測所を置いて塞内の要部を攻擊するが好い、是非さうしなければいかぬ』

と言ひ放つたのであつた。

由つて第七師團は全滅の覺悟を以つて突擊を開始したが忽ち敵彈に依つて打ち腦まされ、將卒の全部は殆ど死傷して到る處屍の山を築き、血汐は土砂を染めて、暗噫たる鬼氣全山に漲つた、然かも尙ほ目的を達するに至らぬので大迫師團長は攻擊隊長に向つて號令した。

『進め、進め』

突擊隊は死物狂ひに叫喚を擧げて侵入したが敵の砲擊は甚くなるばかりで、我軍の損害も益々增加した、それにも管はず東北隅に向つた一隊は漸くにして山頂に突進して頑强に抵抗する敵兵との距離は僅に、十米突ばかりと爲り爆發彈、手投彈、石塊を投げ合ふてゐたが新手の加はる敵は間斷なく逆襲を續けたので味方は漸く現地位を固守するのみで援兵の到着を待つてゐた、一方西南隅に向つた一隊は機關砲の彈丸を雨と浴びて一高地を占領し逆襲の敵の大部分を塵にして萬歲の聲を天地に響かせた、その中にも東北隅への一隊へも援兵が到着したのと突擊又突擊、

漸く二〇三高地の頂上大部分を占領する事が出來た。

處が翌一日の午前二時、優勢な敵兵は手に〳〵爆裂彈を投げて逆襲して來たので味方は死力を竭して防戰したが衆寡敵せず折角幾千の犧牲を捧げて手に入れた兩頂山も空しく敵の手へ渡す止むなきに至つた。

無念骨に徹した師團長は勿論直ちに回復戰を計畫して僅かに西南部の一隅を取返した。

然し味方諸隊の疲勞此上もなく元氣涸れて悲慘の狀目も當てられぬ程であつた、一日から四日までは休養と整理のため攻擊を中止して、五日の午前七時から再攻擊は又始つた、諸砲臺からは二〇三高地めがけて猛火を注ぎ、掩蓋を破壞し岩石を粉碎し士氣を鼓舞したが敵も猛烈に溜散彈を亂射した、やがて時機はよしと齊藤少尉は第一師團の兵を指揮して猛烈に突擊をしたので流石の敵も退却を始めた、更に東北隅へも突進し、西南隅の占領隊と協力して鞍部附近までを占領し敵を更に攻擊し

て翌日の午前八時さしも難攻不落と謠はれた二〇三高地の要害も全部第七師團の手に落ちて仕舞つたのであつた。

乃木司令官の歡びは譬ふるに物なく彼の有名な詩は此時の喜びの心から作られた、

爾靈山嶮豈難攀　男子功名期克艱
鉄血覆山山形改　萬人齊仰爾靈山

かく二〇三高地を我軍に占領せられては旅順も咽喉を扼せられた人間と變らず敵軍の運命は次第に危機に迫つて行つた。

爾靈山と將軍の詩から改稱された二〇三高地へ登ると旅順港内は掌を指す如く市街の有様から敵艦の所在まで一目に收まるので、觀測所の後に攻城砲を据え六日の正午から敵艦めがけて打ち出したので見る〳〵有力な船艦數隻を擊沈し、九日の大捜射には僅に余命を保つてゐたセワストポリー號、外二三の砲艦驅逐艦を射ち拂つて遂に敵の全海軍力を殺いて仕舞つた。

聯合艦隊司令長官東郷平八郎は、バルチック艦隊の東進の準備中を柳樹房に立ち寄つて乃木將軍に挨拶に訪づれ海陸の猛將は暫時言葉を交したのであつた。

十二月十八日には第十一師團が二龍山を爆發させ、三十日には同師團が松樹山を爆發させて此處に三十七年の越年をする事になつた。

この十八日の戰鬪は隨分猛烈を加へ敵前百米突の處へ臼砲を持つて行つて北砲臺へ彈丸を發し敵からは雨霰と浴せかけられたが、味方は任務を盡して側面大破壞に與つて力があつた。

この任務に特に威力を示した砲兵第三聯隊第三中隊全員は乃木司令官から感狀を贈られた、蓋し全隊員へ感狀を送られたのは戰中この外には無い位である。

翌れば三十八年の一月一日、五十七才になつた將軍は新春元旦の早朝から第九師團がH砲臺を占領した事を知つて大に喜んでゐた時第一師團から敵の軍使が白旗を押樹て此方へ來るといふ電話があつた。

『はて何の爲だらう』

兵卒は不審の眼を瞬つてゐたが司令部では

『いよ〳〵開城かな』

と推量してゐた人もあつた。

晩饗を遣つてゐる時、將軍の耳へ、敵の軍使が要塞地區司令官陸軍中將侍從將軍アナトール、ミハイロウ井ツチ、ステツセルの手簡を持つて水師營の南方の我第一線へ來て攻圍軍司令官へ送達されたき由を願ふ事が傳へられた。

將軍は直ぐに軍使を呼び寄せてステツセルの手簡を受け取つた。

旅順口一九〇四年十二月

第二五四五號

閣下よ交戰地域全般の形勢を考察するに今後に於ける旅順口の抵抗は不要也、依つて無益に人命を損せざるため余は開城に關し談判せん事を望む、閣下之に同意せらるゝに於ては開城の條件順序を討議するため委員を指名し並に予の該委員と會合すべき場所を撰定せられんことを願ふ。

予は此の機會に於て予の敵意を表す。

關東要塞區司令官　ステツセル

宛名は將軍であつた。

此時こんな事を言つて來て油斷をさせるのではあるまいかと疑ふ者もあつたが將軍は直ちに答書を作らせて翌日の朝早く軍使を立てゝステツセル將軍の許へ答書を送つた。

將軍の答書は斯うであつた。

旅順口攻圍軍司令官に於て、

閣下よ予は玆に開城の條件及び順序に關し談判せんとする閣下の提議に同意するの光榮を有す、之がため予は旅順攻圍軍參謀長伊地知幸介を委員に指名し尙

之に若干の參謀及び文官を隨行せしむ、即ち一九〇五年一月一日の正午、水師營に於て貴軍委員に會合すべし雙方の委員は調印後批准を待たずして直ちに効力を生ずる開城規約に署名するの全權を有すべく其全權委任狀は隻方最上指揮官の署名したるものにして、互に交換すべし、予は此機會に於て敬意を表す。

將軍は同時に大本營に電報して報告すると兒玉參謀總長から聖旨を奉じた左の返電が來た。

將官ステツセルより開城の提議を爲し來りたる件伏奉したる處、陛下には將官ステツセルが祖國のため盡せし苦節を嘉したまひ武士の名譽を保たしむべき事を望ませらる。

右謹んで傳達す。

然し敵に何樣な計畫があるかも判らないので第一線へは知らさずに未だ警戒を嚴重にしてゐたが少しも前進する氣色がないのを見て青年將校等は、

『何故戰爭をさせないのか、敵は大分弱つてゐる樣だが、此處で吶喊をやれば必ず成功するんだがね』

と腕を扼して憤慨してゐた。

開城委員としては我軍からは伊地知參謀長、山岡、岩村、野津田の各參謀、有賀文學博士、河津通譯官を撰定し、敵軍からはレース參謀長、バラショフ赤十字社長、『レトウヰサシ　艦長、通譯等數名で場所を第一師團衛生隊の使用してゐた水師營の一民家と定め兩國委員は二日午後一時二十分から會見した。

豫め起草して置いた開城規約及び附則を交附して一時間の中に確答されたき由を言ひ置いて一同は退席をした、第二の會見は二時三十分、露國側からの申出には『本規約には旅順要塞の兵を悉く捕虜とするとあれど願はくば解放の恩典に浴させたし、尤も要塞兵の大半は病傷者なる事、宣誓は我國に先例なきを以つて皇帝陛下の裁下を經るべく電報發送の手續を取計はれたき事、軍旗は悉く燒棄する事、

將校には從卒と馬とを引連るゝを許されたき事等の數箇條であつたが、我委員の答へでは、全部兵員は解放出來ぬ事、皇帝への電文は英文に認めれば直ちに發送の手續きを爲す事從卒を伴ふは可なれど馬を連るゝは許さず、荷物の重量は我將校の携帶量に準すべき事等であつた。

露國委員も悉く同意をしたので談判を終り兩軍は直ちに休戰命令に依つて天下の人心を騷がせた旅順攻圍軍もこれで終つた。

將軍は翌日津野田參謀をして『武士の名譽を保たしめよ』とある、大元帥陛下の聖旨を敵將ステッセルに傳へたが彼の喜悅は譬ふるに物無く乃木大將に會見して貴國陛下の高恩を謝し奉らん事を望んで來たので、互に干戈を交へた敵味方の大將は此處に一堂を會する事になつた。

旅順開城

記念すべき兩司令官の會見は明治卅八年一月五日水師營に於て行はれた。

白馬に乘つた肥大なステッセル等が到着すると乃木將軍は幕僚を隨へて引見した、粗末な机を前にして銀髭長軀の將軍は先づ口を開いた。

『由來君國の爲めに力戰しましたが當旅順方面の敵對行爲も熄んだ今日かく閣下と此處に會見するのは私の最も欣幸とする處であります』

ステッセル將軍もこれに答へた。

『私も亦祖國の爲めに旅順要塞を防守しましたが既に開城に決した今日、此處に閣下に會見する機會を得た事は私の最も光榮とする處であります』

乃木將軍は重ねて畏き御諚を傳へた。

『忝なくも我天皇陛下は閣下が祖國の爲に盡された勳功を嘉し給ひ、將軍に武士の體面を保たしむる事を望ませ給ふ旨、私に勅諚がございました私も出來得る限り閣下の御便利を圖りましよう』

『貴國の天皇陛下よりかくの如き恩命を蒙つて私は無上の光榮と存じます、願くば私の深厚なる謝意を何卒御傳へ下されたい』

感激の色を面に溢れてス將軍は言つた。

それからは雜談に時を移した。

『日本諸砲兵の射擊は全く卓絶した技術を有して居ります、殊に二十八珊砲は驚くべき威力でした、日本工兵も勇敢不撓の働きは軍人の龜鑑と思ひます』

ステッセルが斯う言つたので、乃木將軍も露兵を賞めた。

『いや、私は露西亞兵の抵抗力の強大である事を感じましたが、其防禦法の周密堅固は旅順要塞に及ぶものがないでしよう』

ステッセルは急に容を改めた。

『聞けば、閣下は當方面の戰鬪に最愛の二子を失はれたさうでございますが、誠に敬掉の至りに堪えません』

『私は二人の子が武士として其死處を得た事を喜びます、長子勝典は南山に於て戰死し、次男保典は二〇三高地の戰ひで斃れました、二人共武士の家に生れた身で晴の戰場で國家の犧牲となつて花々しく討死したは嘸滿足に死んだでしよう』

この答に敵將は感激した。

『閣下は人生の最大幸福の子寶を犧牲にして少しも哀掉の色なく却つて其二子の死處を得た事をお喜びになるとは眞に天下の偉人だと思ひます』

乃木將軍は重ねて問ふた。

『閣下の御子息は』

『一人ありますが都府に居りまして此度の戰爭には加はつて居りません、旅順にあ

る五人の子供は妻が淋しがつてゐるのと憐んでゐるのとで戰死將校の子を愛撫してゐるのです』

暫して、ス將軍は又言ふ

『私は亞利比亞産と純血種との二頭の馬がございます、二馬とも逸物で此度の記念として之を閣下に贈らうと思ひますが何うぞお受け下さい』

『有難う　謝すのに言葉もありません、直ちに受領致しますが本意でございますが軍規の許さぬ所もありますので一先づ委員に引渡し下さい、さすれば後に相當の手續きをして私はお受け申す何時までも愛用いたします、私の家は代々武士で軍馬とは最も關係が深く私も昨夏愛馬一頭を失ひまして淋しく思つてゐる處でした、愛馬を贈らるゝに際して御心情を酌量して轉た同情の念に堪えません』

ステッセル將軍は頷いて聞いた。

『當方面には貴軍の戰死病歿者の墳墓が散在して居りますが、私は出來得る限り一

團として認識を明かにして其忠魂義靈を永遠に傳へようと存じます、これに就いて御希望がありましたらお聞き申しましよう』

乃木將軍はさう言つた。

『おゝ、その點まで御用意とは御厚意を謝す言葉も持ちません、東鷄冠山北砲臺の西南方の小丘ロマシ山と言ふて居りますが、この地と北砲臺とに將官以下戰死將校の墓があります、若しこれを保護して下されば、此上もない幸です』

『承知致しました』

と乃木將軍は答へた、それから更に親しい會話が續けられた。

『日本軍が海軍砲を山の上へ引き揚げて陸戰に應用した悧巧な仕方は一方ならず驚きました』

將軍は隙さず。

『私は露軍が魚形水雷を爆發用に使つた器用な技倆には感じ入りました』

と鸚鵡返しをして一座を笑はせた。

この會談は午後一時半に終つた。

一月六日には天皇、皇后兩陛下より優渥な勅語と令旨を賜はり第三軍は御感賞に與つた。

續いて大山總司令官からも感狀が來、內地からも山の如く祝狀祝電が飛來したが、これに依つて第一、第二、第三、第四他の軍の士氣を皷舞したのと、國民に安堵の胸を撫でさせたのとは甚大な巧蹟と言はねばならない。

旅順陷落は第三軍の全部が至誠奉公屈せず撓まず戰鬪に從事した結果に外ならぬが中にも攻城砲兵の働きは目覺しい處があつたので將軍は攻城砲兵團に對し感狀を贈つた。

旅順への入城式は一刻も早くやりたかつたが露國兵が居ては氣の毒であると言ふ心から捕虜の輸送を終つた後に入城式を行つた。

先には日清の役に入城をし今亦第三軍司令官として入城する將軍の心は果して何んな感慨が胸に起つたであらう。

十三日光榮の入城式を終ると翌十四日には水師營東方の高地へ祭壇を作り戰死者の大弔魂祭を行ひ終つて祝捷會を聞いた。

第三軍戰死病歿各位之靈

と記した、將軍筆の墓標が一丈も積み上げた土臺の上に樹てられ前面の四脚臺には戰死者の名簿玉串が置かれ、大山總司令官の供物料金千圓を始め、造花、酒、餅魚鳥、野菜、果物が供へられ十四吋砲丸の下に數株の常磐樹が植えられる。

祭壇の用意が全くなると、將軍を先頭に、北白川宮恒久王殿下、大山總司令官代理、軍司令部幕僚、通譯官、外國武官、從軍記者、陣歿者遺族等が左手に併ぶと攻圍軍諸隊は前面から左右兩側に整列した有樣は嚴しく壯なものであつた。

軍樂隊の奏する『國の鎭め』を合圖に靈前に進んだ將軍は沈着に弔詞を朗讀した

雪を含む寒風は颯爽たる將軍の鬢髪を吹いて音調は悲痛なものであつた。

維時明治三十八年一月十四日第三軍司令官男爵乃木希典等謹みて清酌庶羞の奠を以て、我第三軍殉難將卒諸子の靈を祭る、曩に我軍の關東半島に上陸せし以來實に二百十有余日其の間諸子は克く勇往し克く健鬪し或は鋒鏑砲火の下に命を致し或は風饗雨虐の間に病歿せしもの少しとせず、而も其功業遂に空しからず茲に旅順港内敵艦隊の全滅に歸し敵要塞の降伏を見るに至りしは洵に諸子の遺烈に由る希典等諸子と生死を共にし而も生きて、大元帥陛下より優渥なる勅語を下賜さるゝに會ひ顧みて諸子が遺烈を念へは豈獨り光榮と享くるに忍びんや、嗚呼諸子と此の光榮を分たんとして幽明相隔つ哀哉、乃ち我軍の旅順に入るや諸子が忠血を以て染めたる山川と要塞とを下瞰する處を相じ先づ地を清め壇を設けて、庶子の英魂を招く庶幾くば魂や髣髴として來りて饗けよ。

一同謹んで垂頭れて聞く中に將軍の弔詞は終り列座の將卒誰一人として涙を流さぬ者はなかつた、昨日まで苦樂を共に起伏した戰友は再び此世に再會する事が出來なかつたのであつた。

將校の拜禮、本願寺大谷尊由外從軍僧が讀經して盛大な祝勝の酒宴に移つた。

宴會が終らうとする時に、大迫中將の發聲で、

『乃木大將萬歳』

が全軍を壓する如き觀喜の聲で叫ばれた。

將軍も此日は酒量を過して宴後再び招魂祭の祭壇を拜し直ちに柳樹房の司令官へ歸つた。

噫一萬五千の兵を殺し二百十數日の日を費して懸命に攻め立てた旅順要塞も遂に我軍の手に歸した『百年攻めても落ちまい』と言はれた難攻不落も忠勇義烈死を顧みぬ猛將勇士の前には其力を恣にする事が出來なんだのであつた。

問題の旅順はかくして陷落したが滿州軍の第一第二第四軍は何うしてゐたかは此

處へ言つて置く必要がある。

此處でも連戰連勝をし乍ら滿州軍は昨秋敵軍を沙河まで追ひつめこの大河を挾んで對峙してばかりゐた、一擊一退死守を覺悟した敵軍は些とも動かず十月から以來、四ケ月に渡つても勝敗は決する事が出來なんだ。

加ふるにクロバトキン將軍の大軍は直ぐ北方に屯して第五軍司令官リツベンベルク將軍の如きは『旅順の要塞を陷れた勇猛無比の乃木軍が此主力軍に合せぬ前に大會戰を決行しよう』と思ひ定めてゐたので敵の攻擊は次第に猛烈になつてゐた。

丁度この時に乃木軍は旅順を陷入れたのであつたが攻圍軍の兵卒はこれで一休みを愁へる事が出來ると樂んでゐた矢先きの九日の夜といふに、大山總司令官から『奉天戰に參加すべく直ちに北進せよ』

との命令が第三軍へ達して來た。

幾多の苦酸を甜めて旅順を攻畧し、息をつく暇もなく第三軍は北進して援助しなければならなくなつた。

乃木將軍は令を傳へて直ぐ北進の準備にかゝり一月十六日より漸次北進せしめる事になつた、實に火急な事である。

沙河大會戰

奉天方面の敵情は次第に猛勢となつて來たので我軍では旅順軍の應援が來て思ふ樣大會戰をやらうと一日千秋の思ひであつたのである。

此頃より寒氣は急に加はつて雪は野も山も白く包んで寒さは骨に徹する樣であつた。

滿州軍總司令官の希望では第三軍は沙河附近にある滿州軍の左背の遼陽の西方に集つて貰ひたいとの事であつたから第十一師團は別れて鴨綠江軍へ參加する事に

なり第一第七第九の三箇師團と後備二箇旅團、砲兵一旅團（第七旅團）とを將軍が引率して發足する事になつた。

將軍以下の幕僚即ち第三軍司令部は一月二十五日、住み馴れた柳樹房を立つて遼陽へ向ひ、十六日の拂曉漸く遼陽に到着を見たので將軍は直ぐに大山總司令官の許を尋ねて軍務の打合はせをしたが悲しい哉未だ兵は到着して居らなんだ。

漸く第九師團が黑講臺へ急行して我軍に應援して敵兵と會戰し忠實且つ勇敢に奮鬪して遂に勝利を得るに至つた。その爲め第三軍は漸次目的通りの行動を取つて勢力を次第に集めて二月中旬、戰鬪の準備をした。

恰も一月十一日露將ミツチエンコ將軍の率ゐる騎兵隊が兵站部へ襲擊して來たので第三軍の一旅團を以つて擊退し重輜縱列にも自衞兵を置く事にした。

第三軍の主力到着に由つて我軍の內容は美事に調つた。この勢ひに乘じて一日も早く沙河の敵を掃蕩したいと思ひ立ち遼河運河に近い北河に軍を集めて遂に二十六日から前進を開始したのであつた。

滿州軍の總計畫は第三軍を以つて敵の側背に廻し第二軍と協同して敵の左翼を破り次第に敵を東北の山中に壓迫し其戰鬪準備の無い處に於て戰はうと言ふのであつたが此時第三軍の前には敵の騎兵と步兵ばかりであつたから何の故障もなく前進して二十七二十八日兩日中に敵の脊後へ廻つて右翼全部を包まうとし大山總司令官は三月一日から本戰を指揮する豫定であつた。さうして敵の最右翼を破つて奉天大勝の基礎を作るに至つた。

此時風が激しく吹いて前進に就いても第二軍と協力せねばならなかつた、電信不通のためそれすら能きず、乃木將軍は遂に松永參謀長と共に實に大膽な計畫を立て目的を達ねば大敗衂を招いて四萬の兵悉く骸となる大激戰を企てたのであつた

さうして三月二日沙嶺堡に進み遂にクロパトキン將軍の防禦軍と衝突して敵を退却せしめ、追擊戰に移つたのであつたが東烟臺の總司令部から、

『一時前進を待て第二軍は今敵軍を破りつゝ、前進中であるから第二軍が渾河を渡つて、第三軍の右に出るまで待ち合せ協力して北進せよ』

と言ふ命令が來た、止むを得ず軍を止めてゐる間に第九師團は第二軍に力を協せて行く〳〵敵を破りながら第三軍に合した、第一と第四軍はまた沙河の陣地に敵と對峙して動かなかつた。

第二軍が到着すると第三軍は前進して奉天の停車場に向つたが奉天西方二里の地点にクロポトキン將軍が建造した堅固な陣地があつた、直ちに戰鬪に移つて攻擊を開いたが、敵も頑强に抵抗して一層困難を加へた處と第二軍が渾河を渡つて第三軍に合したので第二軍に右翼と中央の攻擊を讓り第三軍はその夜から北折して奉天の北方へ廻るべき運動に着手した。

すると今度は豫備隊全部を持つてクロポトキン將軍は乃木軍を擊破すべく攻めて來たが、大石橋附近の激戰に退却せしめて十分に戰鬪準備を整へて北方奉天へ肉薄して行かうとした。

將軍は各級の指揮官を集めて一場の訓示をした。

『既に深く敵地に入り屢次敵を破ると雖も沙河方面の敵情は依然として勢力を保てるに依つて、此際我々は死を賭して全力を盡し、決勢敵を破る覺悟を要す、我軍の勝利はやがて最后の大勝を意味する、死すべきは今である、各員それ努力あれ』

訓示の意味は斯うであつて之に依つて一同は勇ましい決心を抱いて奉天戰に加はつた。

七日は轉灣橋造化屯附近の敵を破り、八日は八家子附近の敵を打ち、右翼は奉天の西北田義屯附近まで進んで盛んに砂彈を浴せかけた、そして彈丸は確に鐵道線路に達したのであつたが鐵道線路は露軍唯一の後方兵站部であるから此鐵道の破壞は最も必要な仕事であつた。

そこで又一策を案じて北から奉天へ向つてゐた第九師團を東へ向けて鐵道線奪取

の計畫をしたのでクロパトキン將軍は此の体を見全力を鐵道線方面に集めて來た、即ち沙河の廣漠たる陣地に配置したのを引揚げて狹く長く陣を敷いて乃木軍に全力を注いたのであつた。

處が味方は敵に對抗するだけの勢力を無してゐる上に前進し過ぎた爲に彈藥縱列が續かなかつたのであつた。

滿州軍は敵が渾河の戰線から退却しかけた時は總掛りで追擊を決行して九月一部を占領したのであつたが、豫定の退却をした敵軍は乃木軍の正面に集中して田義屯を攻擊してゐた第一師團の如きは敵の逆襲を受けて思ひの外に悲境に陷り第二軍は最も困難な位置に置かれた。

然し將軍は撓まずに戰鬪を繼續して十日には夜襲隊を造つて突擊して遂に北陵を占領したのと、これに勢ひを得て他の方面も攻擊を續行して砲聲突喚斷間なく響いて殺氣は奉天の天地を覆ふた。

しかも敵の兵力はいよ〳〵加はり彈丸が雨と降り注いで來ると共に突如として敵の大縱列が北へ向つて遁出す樣が見えこれ全く敵の退却掩護射擊であつたのであるが悲しい哉彈丸の欠乏甚だしく只切齒扼腕して苛立つばかりであつた。

此處に若し十分の彈丸が我にあれば一擧にして塵殺にする事が出來るのであつた

然し夜に入つてからは全く鐵道線附近を占領して東から進んだ第四軍と合して忽ち優勢となり遂に確實な勝利を得て奉天大戰の幕を閉ぢた。

翌十一日は更に疲勞した兵を勵まして七里ばかり北方の敵を追擊し昌圖、金家屯、法庫門の線を占領して、鴟鷲樹まで進んだ。

この時遂に講和談判の開始となつて滿州にも平和の風が吹き滿ちたので此處に全軍は休戰狀態となつて仕舞つた。

二月二十六日から三月十一日まで十四日間朝は星と共に起き夕は三更に至るまでも居きて燒麭罐詰に生命をつないだ將軍も無聊な日を續ける事になり、

『乃木どんがドシ〳〵進んでくれたでのう』

と歡んだ大山總司令官も戰ひを忘れて仕舞ふ事が出來た。

かくて三十八年九月五日、講和談判は進んで最后の調印も終つたから苦心慘澹州の野に戰ふた人達も遂に引き上げねばならなくなつた。

大山總司令官を始めとして司令部もやがて引拂ひ、二手越しに見る故郷の山河に將卒は指折り數へて此日を待つてゐたのであるから歡喜の聲を擧げて悅び誰の面にも笑が浮んでゐる中に、乃木將軍ばかりは消然として、

『成る可く日本へ歸りたくない』

と言つてゐた、そして、

『若し旅順港へ守備隊でも置かれるやうなら自分は何日までも其司令官として暮らしたい』

と慘々として語つた。

『何故でございます』

かう聞く人があれば將軍は。

『多數の人命を捨てゝ申譯がない、面でも包まなければ日本の地は踏まれない』

と言ふのであつた。

旅順攻圍中多くの人命を捨てたのは皆將軍自身の罪と思ひ、其軍略が惡い爲めと定めて日夜其を心に責められてゐたのであつたが日本の地を踏まない譯には到底ゆかぬ、三十九年一月二日法庫門を發し大連より御用船鎌倉丸に搭乘して馬開海峽を通過し、關門兩地の官民が歡迎船を花の如く艤つて左右に列び沖には無數の花火が揚る中を故郷の長府の沖も過ぎて宇品に上陸し、萬歲の聲を浴びて廣島に入り吉川旅館へ投宿した。

他の將校兵卒が喜悅に溢れながら故郷の山河に接し肉身に會ふ樂しみを夢みるに引換へて、幾多の貴い血を流したと心に責めらるゝ乃木將軍一人だけは暗い〳〵心

持を抱いて凱旋せねばならなかつた。

『今度も又死損ねた、内地では盛んに歡迎會が開かれるさうだが、實は隱れ簑でも被りたい、露助の彈丸よりは歡迎の拍手と萬歳の聲が私には恐ろしい』

これが將軍の其時の言葉である。

學習院々長となる

廣島に一日逗留して十二日朝東上の途に就いて新橋へ着したのは十四日の午前十時半、歡迎の各團体幾萬とも知らぬ人達の熱狂する、萬歳の聲を耳にして、默々と擧手に受けて參内をした。

直ちに伊藤式部官に導かれて御座近う進み明治天皇陸下に拜謁し第三軍の經過を奏上して謹しく復命に及んだ。

陸下はいと御滿足の体に見えさせられ別殿に於て酒饌を賜はり正午退出直ちに參謀本部へ出向いた。

陸下からは畏しこくも、

一、御紋附金時計　一箇

一、御目錄　一封

の恩賜があつて、同時に左の勅語を賜はつたのであつた。

卿第三軍ヲ指揮シ堅固ナル旅順要塞ヲ攻略シ且同港ニ據レル艦船ヲ擊沈シ爾後各地ノ戰鬪悉ク偉功ヲ奏シ克ク其ノ軍ノ任務ヲ達シ洵ニ朕ガ望ニ副ヘリ朕今親シク作戰ノ經過ヲ聞キ更ニ卿ノ勳績ト將卒ノ忠勇ヲ嘉尚ス。

大將の復命書には部下の忠勇美烈を說いて自己の戰功を少しも說かず、作戰計畫の失策等は寸毫も秘密にはせなんだ。

『總て事實を奏上せねば眞の復命ではない』

これが將軍の態度で其復命書には彈藥と兵力との缺乏を記した上に、左側背に迫つた敵騎大集團を擊摧する事が出來なんだのは終世の遺憾であるとまで眞實を吐露してゐるのであつた。

かくて參謀本部に至り東宮御所に參り漸く最后に、赤坂の自邸に入つた。

赤坂區長代理、奬武義會員、府市名譽職員百余名樂隊を先登に押立てゝ邸前に立ち、道の兩側には小學生徒數千名が堵列して萬歲を叫んだ、將軍が邸内に入つた時は玄關前に一門の乃木高之、湯地基、靜子夫人の須序で整列し親戚知己も出迎へた、大將はつか〳〵門に入つて此等の人々に擧手を禮と爲し式台に就かうとして石段に右の一歩をかけた時振り返つて靜子夫人に一瞥を與へた、この一瞬間の一瞥こそ『永の間留守をさせて嘸苦勞したであらう、二兒の戰死を聞いて嘸悲嘆に呉れたであらう』

との深い情を覃められた一瞥であつた。

直ぐに式台に進み入つたが何づれも大將の心事を察して涙を流さぬ者はなかつた

旅順開城の際ステッセル將軍から贈られた白馬『壽』に栗毛『紫』は夫人の心盡しの清く掃除せられた廐へ入つて新らしい主人に仕へる身となつてゐた。

外では毎日々々旗行列や、灯提行列に戰勝の歡喜に醉ふてゐたが、其萬歲の聲が乃木邸の窓へ强く響く毎に多くの人命を損した悲しさと悔ひとがヒシ〳〵と將軍の胸に迫るのであつた。

一日、將軍はこんな詩を作つた。

皇師百萬征强虜　野戰攻城屍作山
愧交何顏看父老　凱歌今日幾人還

一將功成り萬骨枯ると昔の人の文句を思ひ出しては今は自分の身に比らべて言ひ知れぬ悲しみを覺えたのである。

十五日には伏見、有栖川、閑院、山階、久邇、梨本、北白川の各宮家を訪問した。

第三軍司令部は戸山學校に置かれたが復員の終るまでは深く部下を戒めて戰地同樣の心持で事務を執れと命じ自身も毎朝八時には出勤して事務を取つた。

その年の十月、功山寺山の紅葉も色つき外浦の葦の葉に西の風が戰き出す頃、大將は郷里長府へ歸省した。

凱旋以后初めての歸郷と言ひ、功勳一世を蓋ふ大將軍が錦を着て歸るのであつたから長府の町は數百の幟を立てゝ出迎へたが、大袈裟を喜ばぬ大將は此處でも孤劍飄然と停車場を出て直に俥を命じたが、途中に中學生の整列するのを見て思はずも飛び下り叮嚀に擧手の禮をして自分號令をして分列式を行ひ、其儘に毛利子爵邸に入つた。

大將の歡迎會は思出多い二の宮神社の境内で開かれ二十五錢の折詰に正宗の一合壜で質素にして盛大に終つた。

やがて東京へ飄然と風の如く歸つて行つた。

參謀本部定員外配屬となり軍事參議官となると少し暇が出來たので將軍は好んで戰死者の遺族を訪問する事が屢あつた。

先づ村役場か郡役所へ顔を出して軍人遺族の有無、其生活狀態等を尋ねて訪づれ、戰死者の墓に詣でた上に遺族に向つては、

『必竟あなたのお子は此の乃木が殺したも同じ事ぢや、何うぞ許して呉れ』

と言つた。

『然し、閣下もお二人のお子樣を』

『否、私は武士の家に生まれたから、むしろ名譽と思ひもするが、働手を取られて嘸御不自由でしよう』

と金子をさへ置いて去つた。

又、神社へ參詣しても同じ態度で金子を献納するが絶えて姓名を告げた事はない

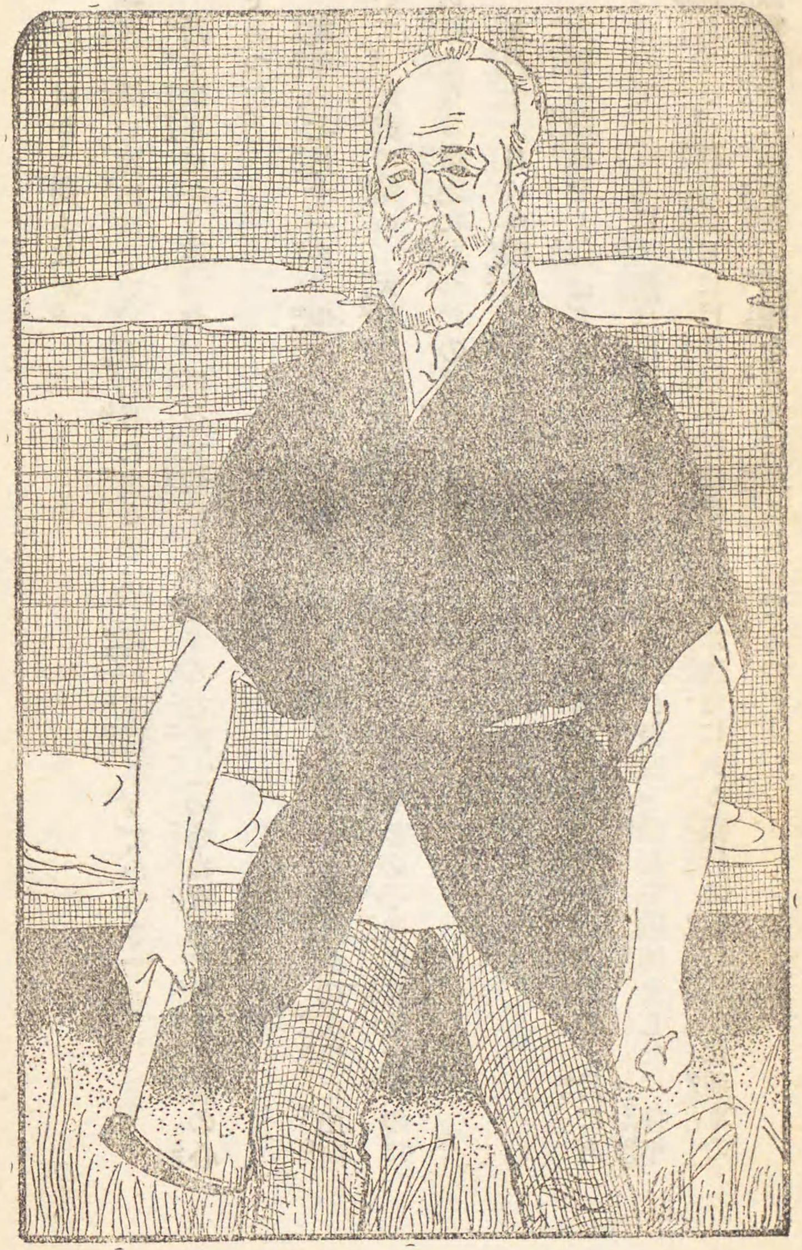
洗ひさらしの飛白の綿服に兵兒帶の姿ではあるが流石にそれと知つて

『あなたは乃木閣下ではありませんか』
と尋ねるものなら、
『只無名氏として取扱つて吳れ』
と答へて去るのが常であつた。
四十年の一月三十一日になると乃木大將は學習院長の兼任を命ぜられた。

いさをある人を敎への親として
ねほし立てなん大和撫子

明治大帝よりはこの御製を賜つて乃木將軍の感激を一入加へたのである。
其頃學習院は四谷見付の外にあつたので將軍は毎朝自邸から騎馬で通勤してゐたが雨の日には必ず徒歩で頭巾も外套もビショ濡れになつて通ふてゐた。
『何故雨の日に徒歩で御出勤なさいます、騎馬か車の方がよろしうはございませんか』

或人はかう問ふたが。
『何、深い理由はない、雨の日に出るのは、馬が不憫さうだからさ』
乃木將軍はかう答へた、馬を大切に且つ愛する古武士の心は直ちに乃木大將の心であつた。
其年の七月十一日、生徒の体育を練るために生徒を連れて相州片瀨の海岸に出向いて、此處に始めて天幕生活を行つた、蒲柳の質の多い華族の子弟の身体は其のため健全なる發達に向つたのは言ふまでもなかつた。
九月十一日には勳功に由つて特に伯爵に聘せられた。
大將の敬慕をく能はざる偉人、山鹿甚五左衞門素行先生の贈位が其年の十月にあつたので、直ちに大將は自費を擲つて贈位祭を行ひ祭文を讀んで敬悼をした、毎年忘れずに、詳月命日には牛込早稻田辨天町の宗參寺にある素行の墓に詣でた將軍の誠實は遂に素行會の組織を見るに至つたのであつた。



生徒に對する乃木院長の對度は宛ら慈父の子に於けると同じであつた、彼は決して院長室には入らずに一般の學生と共に寄宿舍生活をして、學生と同じ物を食ひ、同じ夜具を用ひた、そして朝は早く校庭に出て鎌を採つて草を苅るのが仕事であつた。

東の空がほの〴〵と明けかゝる頃にはもう單獨で草刈を初めてゐたので多くの寄宿生中でも『院長は何時起きるか』を知つたものは多くなかつた。

白髭長軀の將軍が長い腕を延ばして鎌を片手に露深い草を苅る有樣を見て惡戯盛りの學生は、

『かまきり』

と言ふ醜名をさへ與へてゐたのであつた。

大將は酒と同時に煙草が好物であつたが學習院の院内生活をやるやうになつた日からは、斷然煙草と酒とを禁じて仕舞つた。

生徒を引卒して野外演習か演習見物に出た時には大將の慈愛は遺憾なく流露された、旅館は成るべく生徒と同じ家と定め、蒲團も夜具も不完全な物ばかりであつたが夜の二時頃には、何んなに寒くても起き出で生徒の寢所を見廻り。

『風邪を冒いちや可けない、温にしなければいけない』

と氣を注け幼年の生徒に對しては

『草臥れやせんか、足が痛みはせんか』

と慰めて尋ねた。

辨當は勿論握飯で生徒の宿舍へ遣つて來ては

『一所に飯を食はう』

と腰の竹皮包みを取り出すのであつた。

夜は例の如く床の框を枕として極寒の夜も外套を掛けるばかりであつた。

斯く誠心誠意乃木院長は働いてゐた。

もつと面白い逸話が學習院長に任せられた時の事を傳へてゐる。

乃木將軍を學習院長に任じたのは宮内大臣田中光顯伯であつた、伯の留守中、德大寺内大臣よりこの有難い御沙汰を拜して感泣したが田中宮内大臣は歸京して將軍を訪問し。

『今回の勅命に就いては小官も及ばず乍ら骨を折りました、就ては院長俸給の事ですが貴君の御身分では只今の俸給では甚だ薄い嫌ひがありますが、熟れ其内御裁可を仰いで增額の御沙汰をも下される樣取計ひますから今暫時はこの儘で御辛棒を願ひたい』

と言つたが、相手は名に負ふ淸廉潔白の將軍であるから忽ち赫と怒りの色を現はした。

『身不肖ながら、希典は陸軍大將軍參議官の重職を汚し奉つて、如何にせば聖上陛下御鴻恩に酬い奉る事を得るかと只これを念ふの外は他事もない折柄今回内大

臣殿より學習院長の任命がありこれ將に希典至誠を傾倒して盡すべき絶好の時と悅び居りましたが、御說諭によると大任を捧給の多寡に依つて左右させらるゝ樣に存じますが、希典は愚鈍ではござりますが捧祿を食つて生きては居りません、幸ひ身体は水を飯み粥を食ふても生きて行ける樣に鍛へてござります、捧給の多寡に依つて心事を對度せらるゝ樣では一日もこの職に在る事を好みませぬ』

田中宮內大臣は驚いて言句に詰つて引き下つたが、尙ほ腹に据え兼ねる大將は目白椿山莊に山縣公を訪ふて物語つた。

『私、何處までも大命には背かぬ決心では居りますが、宮內大臣の如く金錢上の問題を以つて學習院長の職責を上下せらるゝやうでは迚も此任に堪へ難う存じます、今日限り辭職の決心でございますから、然る可く天聽に達して下さい』

山縣公も驚いて直刻田中宮內大臣を呼びつけ散々に說諭し、將軍に陳謝せしめて漸く事無きを得たのであつた。

大廟遙拜所

四十一年五月二十七日御用有之、滿州へ差し遣はさる旨の沙汰が下つた。

此度は夫人を同伴して日淸日露に思ひ出の多い滿州の地、殊に勝典と保典を失ふた南山と二〇三高地へも赴くのである、其感慨は果して何んなにあつたらう。

準備中旅行用の大トランクが三越から屆けて來た、見るとK.Nogi.と記してある、

『これは可けない、大將の名はキテンではなくして、マレスケと讀むのだから、改めて來い』

と副官は使ひの者に言つた、處がそれを耳にした將軍は、

『それでよい〳〵、Kは勝典の歌文字ぢや丁度戰歿者記念碑の除幕式に臨むのだから此トランクを勝典の物と思つて勝典の靈を伴つて行くと考へれば差支へはない』

と言つた。

靜子夫人同伴、松本副官、參謀本部詰靜間工兵中佐を從へて新橋を發し馬關から神戸丸に乘り込んで大連へ向つた。

大連に着いたのは六日の朝、一度大和ホテルに休憩の後午後六時半思ひ出多い旅順へ向つて進みやがて旅舍に宛てられた都督府將校集會所に入つたが翌日は隨行員を伴ふて、老鐵山下田家屯の露國墓地を見た、仰げば爾靈山は近く聳え幾年前には幾萬の健兒を卒ゐて砲烟彈雨の間に驅逐した處は此處彼處今も同じ朝日の光に照されて折柄初夏の風に青葉の色を薫らせてゐる。

深い思ひ出に包まれて將軍は沈默の裡に立つてゐた。

それから直に白玉山頂の納骨堂に詣で工事中の忠魂碑も見た。

八日は除幕式場から二度までも經た戰場の跡を當時の狀態とは變つた、山や町、野や丘を過ぎて苦戰を追憶しながら心から弔つた。

十日には戰沒露兵のために日本が建てた碑の除幕式があつたので露國からも西伯利亞軍團長ゲルングロス中將も參列し露國からの希望に依つて祭典は總て彼の國の儀式に取つた。

式は十時から始まり、大島都督の式辭に續いて稅所建設委員長の報告があり、都督の除幕となつて引續き祭典に移り、將軍以下露國陸海軍代表者の參拜があつた。

ゲルングロス將軍は二三歩を進んで日本帝國及ひ日本皇帝陛下の萬歲を叫び彼我の參列員悉くこれに和しウラーの三唱があつた、次には大將が二三歩進んで露國及び露國皇帝陛下の萬歲を三唱して式を終り、正午から食堂に入つて立食の後、日露全國の將校は馬車列ねて白玉山に登り納骨堂に參詣して午後七時から階行社で晩饗會、九時からは夜會を開いた。

此の時ゲルングロス將軍は乃木大將に言つた。

『貴國が露軍戰死者の爲めに此の壯麗なる墓碑を樹てられたのを感謝致します』

これに乃木大將はかう答へた。

『御挨拶は此上もなく滿足致します、貴國陳沒將士の墓前に對する私の心情は實に言ふに堪えざるものがあります、前に旅順開城の砌、ステツセル將軍に會して共に麾下幾萬の精靈を傷けた事がありました、私は其際に斯の如く多數の死体を整理するのは短日月では出來ないが私は誠意を以つて完成しましようと誓ひ御希望を尋ねた時、ステツセル將軍は只露國人の建設した永久の墓に改造して下さいとのお言葉でしたが、若しステツセル將軍が此處に居られたら嘸御滿足なる事と信じます』

當夜は煌々たる電燈の下に尙多くの露國軍人が出席してゐた、松樹山に楯籠つて中村將軍の組織した白襷隊に斬り込まれて火花を散らして戰ひに負傷した者、黃金山の砲台を死守して負傷した勇士、來他勇ましい戰歷を持つてゐる者も多かつた、中にもヴアーネーフ砲兵大尉は東鷄冠山北砲臺に一部隊を指揮し健鬪力戰の結果身に四十余ヶ所の重輕傷を受けて人事不省に陷り同砲臺陷落後捕虜となつて松山捕虜

收容所へ送られた猛將であつたが、乃木將軍は此事を聞いて立ち上つた。

『この中に、その樣な勇士があつたとは知らなんだ』

とつか〳〵大尉の前に進んで其兩手を緊つかと握つて振り動かし、互に相抱いて暫時は、離れず當時の有樣を思ひ浮かべて胸塞がり容易に言葉も發する事が出來なんだが、

『凡そ敵として最も恐るべき人は味方として最も賴むべき人です』

と莊重なる口調に叫び、滿々と盛られた三鞭の盃を傾け

『日本流はかうするのです』

と手づから盃を大尉に差し出した、大尉は感慨して暫時言ふ事もなかつた。

この有樣を見たゲルングロス將軍もチチャコフ將軍も何づれも感嘆した。

『この神の如き老將軍は幾歲の壽を保つべきや』

と言つた。

其夜、宴會の闌になつた時、大將は寺内陸軍大臣に打電して報告した。

『本日の祝典は露國側の大滿足の中に結了せり、此段上奏を乞ふ』

十二日に大島都督の告別晩餐會に招かれて夕刻大連に引き揚げ、市内小學校を參觀した後に歸京の途に就いた。

二十二日學習院の校堂へ初等科の生徒數百人を集めて特に携帶して皈つた最近旅順の實景及び紀念碑の繪端書數百枚を頒ち與へて、更に黑板に實景を描いて日露戰役の旅順攻圍戰の說明をし後に

『戰爭は止むを得ぬ事情に由つて國と國とが最後の是非を鐵砲彈丸で爭ふのであるから軍人は最も勇敢に戰はねばならないが、人類相互の間は戰時でも平時でも溫く美しい同情に由つて交はらねばならないものであります』

と諄々として說き諭した。

此時、迪宮殿下も御席にあつて大將の講話を御聽問あらせられた。

この年の十一月から四日間奈良縣地方で行はれた陸軍大演習の南軍司令官を命ぜられたので、七日芳野山に登り南朝の遺跡を隈なく巡視して其夜は芳雲館に一泊し八日南軍の集合地の大和五條町に入り、十日演習を開始したが十三日の最終日に至つて俄に軍司令官を解れた。

何う言ふ理由か判らないが或人はかう言つて、

『統監部から南軍に對して退却命令を發したが將軍は己の軍は敗けては居ない、敗けない者が退却した例を知らぬと言つて應じなかつた、そのため演習を不可能に終らしめた』

との噂さを傳へた、將軍の氣質から不合理な演習を見れば大方そんな事があつたかも判らなかつた。

此頃から將軍は國体を擁護するために自費を投じて中朝事實や、國基、建國の基礎等を說明した著書を出版して各方面へ分配した乃木家の臨時費用は殖えて行く一

方であつた。

翌年目白臺の學習院が落成したので七月十四日明治天皇陛下は十數年振りに同校へ行幸あらせられ、大將の先導で便殿へ着御、正堂へ臨御の上、撰拔生の講義を問かせられた。

尙ほ皇室に對して限りない尊崇の念を胸に抱いてゐた乃木大將は學習院構内に天照皇大拜宮を奉祀する計畫を立て、先日陛下行幸の節玉座の左右に置いた長さ三尺の鉢植の榊一對を御臨幸の紀念として、此旨を奏上し御許可を得たので翌年三月富士見臺に續いた平坦な地に日本四境、即ち樺太、千島、滿州、朝鮮、臺灣等の百八十余個を自費で取り寄せ、それを土臺にして壇を築き自ら鍬を把つて榊一本を植えて紀念樹と命名した。

祖先を崇むることの心も深かつた將軍は出雲の善光寺に佐々木四郎高綱の墳墓があるので態々參拜を思ひ立ち、暑中休暇を利用して、夫人同伴、別莊守と書生を連

れて神戸まで海路を執り鐵路岡山へ出て津山に向ひ、松江へ着したのは十七日の事であつた。

十八日の七時に善光寺へ參詣して祖先の靈を弔つた。

高綱は言ふ迄もなく賴朝の功臣であつたが北條一族の爲めに讒せられ遂に浪々の身を高野山へ登り佛を念じて諸國行脚を思ひ立ち、出雲穴道湖の風光の優ぐれたのを見て足を止め此處に一宇を建立して老を送り、子の光綱は此附近に住居して野木次郎左衛門と言つて野木村の名を起したと言ふ、今でも善光寺には高綱の木僧、金剛杖、負櫃、その中にあつたと言ふ金佛等を藏して、門前にある四ツ目の定紋を刻んだ高さ九尺余の五輪塔は高綱の墳墓であると言ふ事である。

大將が善光寺へ參詣をしたのはこれで二度目であつた、最初は明治三十年の夏臺灣總督を罷めた後で當時、高綱と善光寺との關係、更に今の乃木村と野木次郎左衛門との關係を取調べて確むべき材料を得たので住僧に託して高綱の墓碑を修繕させ

て心ばかりの法會を營んだのであつたが今は墓碑の修覆も成つたので、大將は大法會を營み高さ一丈余の五輪塔數個を修理した。

十九日は出雲大社、二十日は美保神社に參拜し二十一日舞鶴に着き大阪に入つた、二十二日は朝夙く江州八幡驛に着いて蒲生郡安土村の沙々貴神社へ參拜し稚松を裁えて小學校では先祖崇拜に就いて講演し、其夜は岐阜に入つて一泊の上、歸東の途についた。

病氣にかゝる

暑い夏が過ぎて休暇が終ると乃木大將は學習院長としての多忙な日を續けた。

一日女學部の教員增俸問題の時、宮內大臣から叱責された、院長が叱られたと言ふ噂さは忽ち院內にひろがつて沙汰取り〴〵であつたので、大將は全院の生徒を運動場に集めた。

將軍は其前に立つて

『今日私は當院女子部の教員增俸に就いて旨目判を捺して宮內大臣から叱責されました、誤解のないやうに報告する、終り』

と言ひ終るや直ぐに院長室へ引き上げて行つた。生徒は余りの呆氣なさに顏を見合はせるのであつた。

十一月六日には奈須野原の陸軍大演習を見學に乃木院長は生徒を引卒して兵士と同じく天幕生活をして暮らしたが、大將は夜中一睡もせず天幕を見廻つて朝は生徒の目の覺めぬ中に自ら辨當を配つたりした。

夫人靜子も此時那須野の別莊に赴いて薩摩芋を蒸したりして疲れた兵士を稿ひ、別莊は軍用旅舍に宛てられたが大將は一度も敷居を跨げずにゐたし夫人は、下女と間違ひられながら、眞黑になつて臺所に働いてゐた、そして此處が乃木の別莊であ

る事を兵卒には隱くしてゐたのであつた。

演習は次第に進んで生徒もそれに從つて進んで一日乃木將軍は農家へ宿泊した。

此家の主人は元第三聯隊の兵士であつたから武名赫々たる將軍を泊める光榮を思ひ、田舍での最上の鷄卵料理を澤山に作つて晩饗の膳に上せた。

『妙な事を聞きますが、この鷄卵の御馳走は生徒にもありますかね』

大將は皿の上を眺めて言つた。

『いや、ございません』

主人はさう答へて大將の面を見上げた。

『さうですか』

と言つて將軍は遂に一著もつけず、自分も軍隊よりの辨當を食したのであつた、そして此鷄卵の料理は翌日學習院の小使として働いてゐる十年戰役に將軍の部下として花々しく戰つた大西と呼ぶ老爺に送つた。

勿論夜も例の如く隣室には澤山の蒲團が積まれても被らうとはしない。

『院長さん、お蒲團がございますよ』

老体を慮つて學生がさう注意すると。

『いや、そんなものは要らん、演習は實戰も同樣に心得ねばならん、殊に兵卒は眠つてゐないか判らぬのに自分ばかり蒲團の中で寢る事は出來ない』

と言つて衣兜より白布を取り出して顏に當て其儘床緣を枕と寢るのであつた。

『軍人たるものは造次顚肺事ある事を忘る可からず』と言つてゐた將軍は嘗て軍服をすら脱いだ事が無いのであつた。

演習が終了すると直ぐに歸京した。

この中に四十二年十二月廿七日となると街々には號外の鈴の音高く伊藤博文公のハルピン停車場の暗殺を傳へた。

廣庭の中央に佇んでゐた將軍の手へもこの兇報が號外となつて渡された、讀み終

ると乃木將軍は小聲で、

『ア、、伊藤公は好い死處を得られた、羨ましいワイ』

と言つて流石自分の副官をしてゐた男の隨行員中にあるのを思ひ出して、

『松本は何ういふ處置をしたか、立派にやつたかな』

と獨言を言つた。

相變らず院長は生徒の寄宿舍に入つて、十二疊の一室を讀書室とし他の六疊を寢室として寢具も食事も總て同じ物を取り、若し皿上の肉一片でも、それが他の者より大きかつたら直ぐ取換へて食してゐた、嚴寒にも炭火を近づけず、生徒が『寒い』と言へば、

『乃公の樣な老人でも辛抱してゐるではないか』

と笑つてゐた。

朝は四時半か五時に起床し冷水摩擦の後に紀念樹へ參詣し上柄の大鎌を持つて九

萬坪に余る院内を見廻り、草を苅り、門の開閉に注意をし、幼年食堂で生徒同樣の朝飯を取り教員の喫煙室で教員の出揃つてゐるのを檢めて門を出て四谷小學校へ教授振りを眺め、正午は中年食堂に食を取るべく學習院に歸つて、

一週間に三度づゝは午後二時から三時まで教師と共に生徒を相手に武技を練つてその後入湯して始めて自分の用を辨するのであつたと言つても其多くは墓碑其他の揮毫又は讀書で晩饗は又高等科の食堂へ顏を出した。

從つて以前苦情を言つてゐた若者達も大將赴任以來文句を言ふ者がなくなつて來た。

夜は諸方から寄贈して來る雜誌や書物を繙いて新刊物の寄贈に對しては無代で貰ふ事はせず一々代價を送り屆けてゐた。

十時になると自ら電燈を消して寢所に入り鼾聲を雷の如く響かせて安眠した。

自宅へは月に一二度歸るばかりである。

其頃ある人が斯う尋ねた。

『あなたも御子息をお二人までお亡しなすつて、嘸お淋しうございませう』

その時大將は眞面白になつて

『いや二人の倅を亡くした代りに恁樣に澤山の子供を得ましたから、少しも淋しいとは思ひません』

然く、學習院の生徒を皆我子の如く慈悲深い手で敎育してゐたのであつた。

四十三年の夏七月は又生徒百六十名を連れて江の島片瀨の海岸に天幕生活をしたが、二十八日大將が海水浴を終つて海から上らうとする時浪を被つて砂の中へ倒れた。

起き上つて頻りに耳を振つて居たが翌日の夜十一時頃寄宿舍の戸を叩いて

『何うも耳の中へ蟲が入つて刺すやうで痛んでならぬが、一寸見て呉れぬか』

と言つた、猪谷生徒監は覗いて見たが分らぬので村上三等軍醫正が來てゐるから、

それに見せようと直刻同道して宿所へ行つて診察したが、

『こりや多少掀衝を起してゐます』

との事であつた、續いて

『ひどく痛みますか』

と尋ねると、大將は

『いや左程でもない』

と答へたが辛棒強い大將が夜中態々起きて來たけれども、苦痛の程は知れてゐるので軍醫は當座の手當てをして將軍に言つた。

『兎に角捨て置いては宜しくありませんから、東京へお歸りになつては如何です』

然し將軍は肯かなんだ。

『いや歸つた處で仕方がない』

翌三十日には葉山の離宮に三皇孫殿下の御氣嫌を伺ひ奉り正午頃に歸つて來た

が、村上軍醫正の再診察では患部は餘程不良であつたから遂に冷掩法を施すために面一杯の大袈裟な繃帶をして仕舞つた。

『かうされちや困る、不自由で仕方がない』

流石の將軍もかう言つて困つた。

『ではお歸京なさい』

軍醫正は亦得たりと突き込んだ、遂に八月一日東京へ歸つて專門醫の治療を受ける事になつた、赤十字病院の平井軍醫監を呼んで相談したが、それなら山上兼輔が宜からうとの事で早速診察を乞ふと、中耳炎にはならぬが然し油斷はならぬといふので片瀨の一同には『安心せよ』と電報を打つて東京に居る事になつた。

九日遂に赤十字病院に入院し十日切開手術を行つたが多少痛みが去つて安眠が出來るやうになつたが油斷は出來ない。

廿一日大醫立會の上にて更に大手術を行ふ事になつて一同心痛したが結果は極めて良好で切開した疵口も殆んど全癒したらしかつた。

例に依つて將軍は、

『退院々々、こんなに長く職務を怠つては濟まぬ』

と周圍の人を困らせた。此間に立つて踵を接して來る見舞人に接し、夫の介抱に盡心した、靜子夫人の看病振りは天晴他の模範ともすべき美事さであつた。

四十四年は大將は六十三才、靜子夫人は五十三才の年であつたが此頃から井上通泰の門に入つて添削を乞ひ和歌の趣味が深くなつて行つた。

二月十四日に及んで依仁親王同妃殿下が英國戴冠式に臨御のため渡英されるに就いて、乃木大將は東郷大將と共に隨行を命ぜられた。

大將は御沙汰を拜すると共に『老体の渡歐生還を期せず』とあつて出發の前五日學習院よりの歸途を青山の石工進藤鑾齋方に至つて墓石を注文し、自ら筆を取つて『陸軍大將乃木希典之墓』『明治　十　年　月　日死』と二枚の紙に記して渡した

ので鑾齋は伊豆眞鶴で採つた格好の好い天然石を見せ、大將の滿足を得た。

大將はやがて相應の代金を支拂ひ石は其儘に預けて去つた。

やがて御一同のは東京を發し四月十二日に横濱を解纜して渡歐の途に上つて行つた。

上海では寒山寺に詣で、香港では町を見物し新嘉坡に出でコロンボに渡り釋迦寺を見てから直行し戴冠式一週間前倫敦へ入つた。

明治天皇の崩御

大將はスコットランドの古風な所が氣に入つて四日ばかりを暢氣に遊んで六月十八日から一週間の莊嚴なる戴冠式を終り、キチナー元師の率ゐた倫敦小年義勇隊を見て、キートンハロー等の學校を參觀し、オルダーショットの大衞戍地を見舞ひ、

七月一日佛國巴里に赴いて士官學校、小中學校、歩兵隊を見學して獨逸伯林へ立寄り二日間滯在してウインに渡り、小學校、貴族學校、士官學校、騎兵士官學校、砲兵學校、歩兵隊を一週間ばかりで巡視し、巴爾幹半島の旅客となり、ルーマニア、トルコ、ブルセリヤを廻つて再び伯林に歸り、皇帝に拜謁してマインツ宮城に陪食を仰付られ、西比利亞線に塔乘して露都に至り舊友ステッセル將軍に會せんと思つたが無理に差し控へて浦塩から敦賀へ上陸をしたのは二十八日であつた。

暫く旅の疲れを那須野の別莊に休めて相變らず、小作人と膝を交へて快談をしてゐた、大將は此地方が邊鄙で國家の大祭祝日にも國旗を揭げる者がないのを知つて永久に保存の出來る袋を仙鶴紙にて張つてこれに澁を敷き、中に一族の國旗を入れて、表に國旗の二文字を題し、これを揭揚する大祭祝日を記入して各戸へ配つて四十五年一月一日より實行せしめる事にした。

再び東京の人となると又精勤な院長振りを發揮して乃木大將は學習院に多忙な

日を送つてゐた。

春が去り青葉の初夏に入ると早や七月が來たので大將は例年の通り學習院の生徒を率いて相州鎌倉へ水泳練習の爲め赴いた。

噫この時、突如として憂ふべき悲報が九重の雲深き邊りより發せられた。

天皇陛下御不例

人々の面には暗い色が見えた、全生徒も全職員も誰も彼も消然と首を垂れた、殊に誠忠の心厚い將軍の顏には憂ひの雲が濃く被つてゐたのであつた。

その日急いで東京へ歸り參內して御見舞ひを申し上げた後晝夜宮中に詰め切つて時々刻々御容体を伺ひ奉り赤誠を里めて御平癒を祈つた。

幾千萬の國民はこの悲報を聞くと等しく、鎭守の森に詣で、氏神に賽して只、大帝の御平癒一日も早からむ事を願つた、恰も子が慈父の病氣を氣配ふ如く老幼男女は肅然として神佛に祈願した。

此處の社、彼處の寺には禱の詞文を讀む神宮の聲と、高く經を擧げる僧侶の聲が梢に鳴く蟬の聲よりも喧しく響いた。

そして誰も彼もが天の一方を望んで靜かに御平癒の喜報を待つてゐた。

翌日も發表があつた、然しそれは喜報ではなかつた、御病狀依然として變らせられず、と言ふ報であつた、幾千萬の赤子は更に神前に額づいた。

そればかりでなく二重橋畔砂淸き處へ伏して沈思默考の後靜かに、大帝の御平癒を祈つた。

やがて黑山の如き群衆が其處に消然として默祈してゐる姿も見えた。

けれど宮中から發表された御病勢は其配慮を裏切つて來た。

御病勢は次第に惡化せられたのであつた。

一日過ぎ二日去り三日を經る間にも御病勢は御平癒には迎ふには行かなんだ。

そして七月三十日になると、一大悲報が日本全國へ早鐘の如く轟き渡つた。

天皇陛下は崩御あらせらる。

算盤を彈いてゐた商人も、田の草を苅つてゐた百姓も呆然として暫時はなす事も知らなんだ。

神武以來の英明に亘らせられた明治天皇陸下は再び此世では御拜顏は出來ないのであつた思へば、國家大事の秋に御誕生遊ばされ、王政覆古の大令、五ヶ條の御誓約の後には御丁年に滿たせ給はざる御身を以つて御即位になり東京駐輦や、藩籍奉還と共に廢藩置縣の斷行をせられ、帝國憲の發布やら、日清日露の戰役、鎭國の日本が一躍五大强國の一に烈したのは補佐し申した潔物及び志士等の功に依るが、一に、明治天皇陸下の御英明と御威力に依つた事を忘れる事が出來ないのであつた、その大帝は既に此世には在さなかつた。

愁の雲は深く地に乘れて日本全國津々浦々までも銷して仕舞つた。

この悲しみの中に、人一倍多い愁を抱いて乃木大將は首を垂れてゐた。

一躍少佐に任命せられて以來、西南の役では保護すべき聯隊旗をも失ふて割腹をして申譯をする身が反つて除勳に相成り、日清日露にも、只人命を損じて恥多き希典に陸軍大將伯爵まで下された御厚恩を追憶すると、只悲哀の涙と感激の聲ばかりがあつた、此御高恩の萬分一にも報ひ奉らんとして得ない不甲斐い身と絕えず將軍は心を痛めてゐたのであつたから晝夜宮中に詰め切つて御容体を伺ひ奉り赤誠を覃めて御平癒を祈らねばならなかつた。

そして御發病以來崩御に至るまで實に百回の參内をして遙かに御座所を拜したのであつた。

將軍の此赤誠を以つてしても如何とも爲し得なかつた。　明治大帝の崩御は强く〳〵將軍の胸を打つた、さうだ絕えず頭に浮んでゐた軍旗紛失のお詫びは、今御跡を追ひ奉つて謝し申さんと思ひ立つた。

それは崩御後の三日目でさり決心すると將軍は自邸の標札を取り外して仕舞つた。

そして尙人知れぬ決心お抱いた身で參內して殯宮を拜してゐたのであつた。

愈々御大葬が九月十三日の夜と發表された。

同時各國から御名代の貴顯が陸續として日本へ立迎ひ宮內省の多忙は一入增加して行つた。

九月一日になると、掛り官からコンノート殿下の接伴掛を勤めらるゝやうとの內談を受けた、此決心をしてゐた將軍は流石に困り果てた。

『私は先帝陛下の御供をする心だから或は十分に職責を盡す事が出來ぬかも知れぬ』

と言つた、掛官は御大葬の御供に加はるべき心と察したので、

『その位なら差繰は何の樣にも付けます』

と言つたので將軍も

『さらば、謹んでお受け致しましよう』

と滿足さうであつた。

此內にも、殯宮を出せます御葬儀當日が近づいて來るのであつた。

殉死

九月八日には大將は山縣公を目白の椿山莊に訪問して美濃罫紙五枚程の漢文で認めた冊子を取り出した。

『恐れながらこれを、今上陛下に獻上したく思ひます、何うか御配慮を願ひます』

と言つて更に細長い白封筒に入れたのを手渡した。

『承知しました』

山縣公は委細承知の旨を答へたが、大將には何となく誠意の足らぬ樣に感じたので若しこれが御手許へ屆かぬ事があつては切角の苦心も水泡に歸すと思つて御大葬當日の朝、殯宮に御別れを告げるために參內した時に、

暫時の間御前に跪いて一心に何事をか念じ申し上げて詰所へ退き、日頃親しくする其侍從に面會して、山縣公に託したと同じ物を丁寧に帛紗包みとして渡して

『この一書をお上御手許へ奉らんと思ひますが何うぞ上奏の手續をして下さいませんか』

と言つて頼んだ。

大將の氣色の常ならぬのを見て侍從は、

『よろしい一身を賭して御手許へ獻らせませう』

と答へたので大將は滿足の体で退出した。

此の上書には何樣な事が書いてあつたか判らないが大將の誠忠が一字一字に籠つて大方陛上日常の御心得ともなるべき事であつたらうと思はれる。

家にあつては人知らず整理をしながら、江洲沙々貴神社へ奉納する小堀鞆音筆の佐々木四郎高綱の像に自ら其旗標と中朝事實の一節を認めた、三幅對を表裝させ、

それを二階の居間の壁に掛けてゐた、丁度其處へ御大喪拜觀に來た末弟の大館集作がやつて來たので、

『好い處へ來たお前に見せるものがある』

と將軍は三幅對の前に伴れて行つて鞭を取つて文章の意義を講義し、先祖の偉功を語り聞かせた上で集作に吩咐けた。

『お前が長府へ歸る時には、この掛物を沙々貴神社へ奉納して呉れ』

集作は何の氣なしに大將の詞を聞いてゐたのであつた。

十日には迪宮裕仁親王殿下が陸海軍少尉に御任官あらせられたので大將は拜謁を願ひ出て先づ御任官のお喜びを申し上げて携行した自費で飜刻した、中朝事實を恭しく献上した。

『此書の要點には希典自ら朱點を付けて置きました、將來御位に即かせらるべき時に、御參考ともなるべき事が多いと確信仕りますから何卒御精讀なされますよう

御願ひ申します』

と言つて續いて

雍仁、宣仁兩親王殿下にも拜謁して一時間に亘つて種々お爲めになるべき事を言上して漸く退出した。

十二日には心靜かに遺書を認めた。

コンノート殿下が御歸國の途次旅順を御檢視あらせらるゝに就いて同地方の地圖に英文を記入する用事があるので、副官に來て呉れて言つて置いたのであつたから午后四時、時刻を間違へず山田副官が訪問して來た。

大將は元氣よく莞爾として

『地圖は陸軍省へ委托したから後に熟く聞き取つて呉れ、今日は鄕里から弟も來てゐるから何もないが、蕎麥會を聞くつもりだ、君も付き合つて呉れ』

さう言つて一同談笑の中に蕎麥を食つて間もなく白須關東都督府參事官も來る。

蕎麥會は盛大になつて行つた。

やがて副官は膝を前めた。

『閣下に御示敎を乞ふ事がありますが、私は旅順激戰の實驗から見て人間の勇氣には先天的と後天的の二つあるのを知りました、前者は其人特有の至寶ですが後者は各自の修養に依つて得られる事を旅順攻擊の際、死生の間に覺悟しました、修養の方法は思慮斷行、由つて私は家の壁にも劒の柄にも悉く此四文字を記して居りますが、閣下のお考へは何うでしよう』

『良い考へぢや、日本一の考へぢや、人間はその勇氣がなければ可けない』

力を籠めて將軍は言つた、そして

『然し私も西南戰爭で軍旗を失つた、それも日本一ぢやねえ』

と大笑したのであつた。

其日も暮れて九月十三日は遂に來た。

悲しみも、愁ひも、喜びも、笑ひも、超越した月日の流れは無情にも此處に明治四十五年九月十三日を齎らせた。

此日朝早くから赤坂の字眞師秋尾新六が前日からの依頼に由つて出て來た、靜子夫人はその少し前から多年出入した髮結に髮をお下げにさせてゐたが、

『今日は御所へ上つて夕暮から御大葬のお見送りをするのですが、何うか持つて呉れりア好いかね』

と言つてゐた。

やがて大將は陸軍大將の正服、靜子夫人は白襟の黑の襠衣、袴を穿いて庭へ下りた。

『コンノート殿下に獻上するのだから注意して呉れ』

かう言つて、レンスの前に立つた。

大將夫妻は此だけで止める心であつたが寫眞師が、

『室内の御用だらうと思つて室内撮影の用意をして來たのですか』

と言つたので

『それなら室内で、もう一枚撮らう』

と二階の西洋室で大將は正裝のまゝ圓卓の前の椅子に眼鏡を掛けて新聞を讀み、夫人は其左手に立つてゐた。卓子の上には煙草盆と朝日の袋とを載せ、違ひ棚には一口の短刀が置いてあつた。

泰然とした態度で寫し終ると廻されてゐた宮内省の白自動車に乘つて將軍は夫人同伴で參内をして殯宮に永久のお別れを告げ奉つた。長の年月奉仕した宮中もこれが永別であると思ふと流石に名殘の惜しまれて午前八時から九時頃まで、こゝと思ふ所を拜觀して更に十二時近くまでも宮中に留まり交際ある大官に餘所ながらの暇乞をした。

服喪中にイ刀を採るのは武士の禮にないと言ふので崩御後一度も顏を剃らぬ將軍

は髭は蓬々と面の半を埋めて痩せた面には深い悲痛な色が窺はれた。正午過ぎ大將が邸に歸ると直ぐに寺内伯から電話があつた。

『痼病の痔疾が惡いのだつたら、それを押して長い御道筋を奉送するのは定めて苦痛であらうから、コンノート殿下接待掛に勤めて居られる事故、同殿下と共に先着ある方が宜しいだらう』

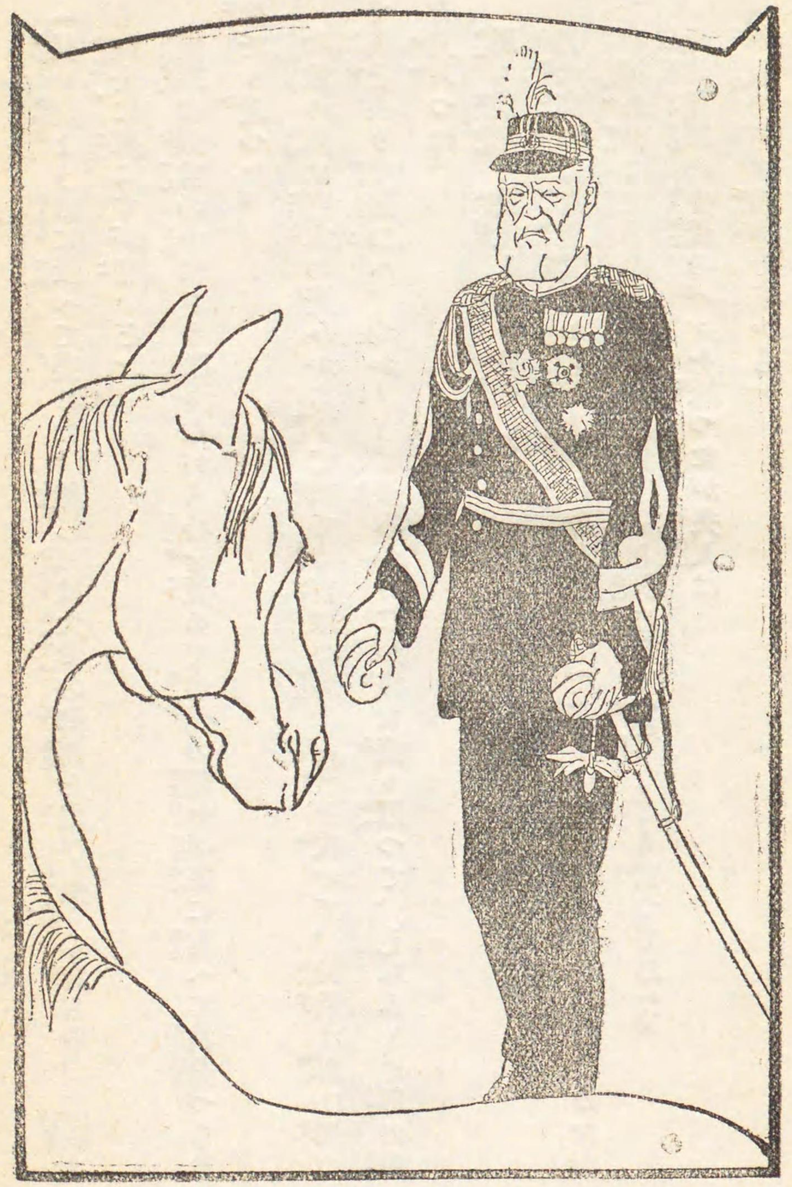
大將は厚意を謝したが更に日頃の氣質を知る寺内伯は押して奉送するかも知れんと思つて更に書面を出したのだ、

『では諸君から同樣の御忠告を受けて居るから御厚意に從はう』

と返答をするに至つた。

直ぐ立つて大將は厩を見舞つた。

ステッセル將軍から送られた二頭の馬も今日が長い別れであつたので將軍は兩手にカステラーを持つて行つた、馬は高く嘶いて大將を迎へるのであつた。



『長い間よう私に仕へて呉れた、然し私は大帝の御跡を追ひ奉る身ぢや、二匹とも健全に暮らすが好いぞ』

將軍は無言の中にさう語りながら心を籠めて名殘の糧を平等に與へて其鼻づらを撫でゝ遣つた。

初秋の風は庭木の繁みから下て來て物言はぬ馬の鬣を吹いて、大將は思ひ切つて廐を去り玄關口へ、つか〳〵と歩みかけたが復た振り返つて、しみ〴〵と馬の面を見入つた。

馬も前足で幾度も板を鳴らしながら高く悲しげに嘶いたのであつた。

乃木邸には鄕里其他から御大葬拜觀を名として多くの客が呼び寄せられてゐたので將軍夫妻は夫等の人達と共に食事をし例になく戯言なども言つてゐた。

此時將軍の少量のパンを採つたが夫人は

『御飯の方は勝手ですから』

と言つて何も食べなかつた。

次第〳〵に時刻が迫つて行くと客は皆出て行つた、そして

『早く御飯を食べてお前方も拜んでお出で』

と食事をさせて馬丁や、女中にも參入證を與へて出して遣つた。

後は寂寞とした世界であつた。

二階の八疊に小さい花模樣のある絨氈を敷いて美しい文臺を置き其上に、明治天皇の尊影を飾り奉り二基の神酒瓶子を左右に供へて間の恩賜の金杯を置き銀製の香爐をこれに薫らせ、唐紙に書いた辭世一首を供へた。

かしこくも慕ひまつらむ天津日の
かけりしみちの只一すぢに

そしてその次の間に六通の遺書を置いた。

其文面はかうであつた。

遺言條

第一　自分此度御跡を追ひ奉り自殺候處恐入候儀其罪は不輕存候然る處明治十年役に於て軍旗を失ひ其死處を得度心掛候も其時を得ず、

皇恩の厚に浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早や御役に立候時も無日餘候折柄此度の御大變何共恐入候次第茲に覺悟相定候事に候。

第二　両典戰死の後は先輩諸氏親友諸彦よりも度々懇諭有之候得共養子弊害は古來の議論有之目前乃木大兄の如き例他には不勘特に華族の御優遇相蒙り居實子ならば致方も無之候得共却て汚名を殘す樣の憂へ無之爲め天理に背きたる事は致す聞敷事に候祖先の墳墓の守護は血縁の之有限りは其者共の氣を付可申事に候乃木新阪邸は其爲め區又は市に寄附し可然方法願度候

第三　資財分與の儀は別紙の通り相認め置き其他は靜子より相談可仕候

第四　遺物分配の儀は自分軍職上の副官たりし諸氏へは時計メートル眼鏡、馬具、

刀劍等軍人用品の内にて見計の儀塚田大佐に御依頼申置き候大佐は前後両度の戰役にも盡力不少靜子承知の次第御相談可被成候其他は皆々相談に任せ申候

第五　御下賜品（各殿下よりの分も）御紋付の諸品は悉皆取纏學習院へ寄附可候此儀は松井猪谷両氏へも依頼仕り置き候

第六　書籍類は學習院採用相成候分は成可寄附其餘は長府圖書館へ同行不用の分は兎も角も候

第七　父君祖父會父君の遺書類は乃木家の歴史とも云ふべきものなる故嚴に取纏め眞に不用の分を除き佐々木侯爵家又は佐木神社へ永久無限に御預け申度候

第八　遊就館へ出品は其儘寄附致し可申乃木の家の記念には保存無此上良法に候

第九、靜子儀追々老境に入り石林は不便の地病氣等の節心細くとの儀尤もに存候故、集作に讓り中野の家に住居可然同意候中野の地所家屋は靜子其時の考へに任せ候

第十　此方死骸の儀は石黒男爵へ、相願置候間可然醫學校へ寄附可致墓下には毛髪

爪歯（義歯共）を入れて充分に候（静子承知）
恩賜を頒つと書きたる金時計は玉木正之に遣はし候筈なり軍服以外の服装にて持つを禁じ度候
右の外細事は静子へ申付置候間御相談被下度候伯爵乃木家は静子生存中は名義之可之候得共吳々も繼絶の目的を遂げ候儀大切なり。
右遺言如此候也
大正元年九月十二日夜

揚地定基殿
大館集作殿
玉木正之殿
静子どの

希典

これは十二日に書かれたが最初將軍は一人で御跡を慕ひ奉る筈であつたが流石に静子夫人にも懇望せられて遂に二人で殉死をしたのであつた。
其遺書の次には更に二首の辭世を認めた。

うつし世を神去りましし大君の
みあと慕ひて我は行くなり

神あがりあがりましぬる大君の
みあとはるかにをろかみまつる

静子夫人の辭世には

出でまして還りますなしときく
今日の御幸に逢ふぞかなしき

御尊影から四尺ばかり離れて大將と夫人は謹んで禮をした。
陽は既に傾いて淡き寒さが夜と共に戸の隙間から襲つて六千萬同胞の哀傷が雲の

如く天を蔽ふのであつた。

やがて午前八時十分、轜車の御出門を知らせる號砲が暗を破つて天地に響いた。

『今こそぢや、覺悟はよいか』

と夫人を顧みて大將は陸軍大將の大禮服の上着を脱いで疊み白い紐を輪にして首から足へ掛け体の伸びぬ用意をした後に傳來の一刀大兼光を右手に握つた。

莞爾と笑つて受けた靜子夫人は白襟無紋の黑服鈍色の袿衣に柑子色の帶を締め膝をしかと綁つた。

『さらばぢや』

大將の口から此言葉が出ると大兼光は左から右へ一文字に切られ刀の止つた處から一寸も上へ切り上げて更に刀を持ち直して及を内へ咽喉を貫き柄を絨氈で支へるやうにして其上へ俯伏した。

夫人も後れずと短刀を拔いて第一に胸を刺したが肋骨が堅くて切れなかつたので

第二に直ぐ下を刺しそれから第三に左の心臟部を強く刺して押併んで伏俯に倒れたそれはさながら尊影を伏拜むやうにも見えた。

あはれ日は落ちて月は隱くれた。

肉体は此處に殘して將軍夫妻の靈魂は高く御跡を慕ふて天の一方へ飛び去つたのであつた。

大帝を失ひて愁の思ひ深き今日、六千萬の國民は將軍夫妻の死に依つて更に其悲しさを增し哀れさを加へた。

そして赤誠以つて國に報じ、忠勇以つて君に奉じた、最後まで古武士としても恥しからぬ將軍の言動は強く〳〵人々の心に刺擊を與へねば置かなんだ。

『大道廢れて仁義起る』輕薄な思想が沼々と渦卷く中に將軍の死は警告とも敎訓とも見えたのであつた。

殉死の報告には驚愕が起り、驚愕の次ぎには深い感激が人々の胸を占領した。

やがて其言動を模範として進む人達も出來れば『乃木式』なる新熟語すら生み出されて多くの日本國民に大なる影響を與へたのであつた。

青山の乃木邸を拜する人は踵を接して其疊上に黑く流れた血痕の跡に忠君愛國の至誠を學び、青山墓地の墓碑に詣でゝは乃木將軍の精神を偲ぶのであつた。

かくて眞鶴石の小さな自然石の墓碑には地上に日本國民の根絶せぬ以上は何日の世、何日の時にも香煙は長く柵引いてゐるに違ひないであらう。（完）

乃木大將

終

大正十四年二月十七日發行
大正十四年二月十二日印刷

發行所　振替大阪三四九四番　一書堂書店　大阪市南區宗堂町堺筋四丁目三拾九番地

印刷所　印刷者　今西元治　一書堂印刷工場　大阪市南區鰻谷西之町三丁目九番地三拾番地

發行者　井上尚一　大阪市南區宗堂町堺筋四丁目三拾九番地

著作者　碧瑠璃園

定價金九拾錢
乃木帝典奥付

ISSHODO

舊稿を一蹴し更に新しき力作

珊瑚園叢書

碧瑠璃園著

新版出づ！

1 大石内蔵助
2 乃木希典
3 豐臣秀吉
4 木村重成
5 清水次郎長

以下續々刊行

本叢書は毫も虚説を交へず、内容の眞相行文の流麗、高級講談的に而も体裁定價等總べて時勢の先駆たり

四六判洋裝
各冊二百八十頁餘
口繪十數葉
定價金九拾錢
郵税各八錢

大阪市南船場安堂寺町四丁目一七七
電話 一七五七
井上一書堂
振替大阪 三四九四

285
208